

機長な御曹司の一途な執愛に  
孕まされそうです

1.

三月、中旬。

例年より暖かい日が続いたためか、日当たりのいい場所にある桜並木が一輪、二輪と花を綻ばせだしている中。

水谷理沙は天王洲にある自社ビルの屋上庭園で、昼休みを過ごしていた。

片隅にあるベンチで空を見上げつつ、遠くイタリアはヴェネチアから配信されるライブ放送に耳を傾け、お弁当の包みを開く。

お弁当といっても一人暮らしで節約のために始めたこと。中身は大したものではない。

作り置きしている鶏のつくねに、急いで焼きすぎて端が焦げてしまった甘い卵焼き、レンジで蒸したプロッコリーに、ゆかりをかけたごはん。それだけだ。

これでせめてもミニトマトがあれば、彩りが華やかになったかもしれないが、残念ながらそこまでの余裕はない。

中身も知れたお弁当を手探りで開きつつ、理沙は思う。

——空がけぶっている。

もともと首都である東京の空は、故郷である九州よりどこか薄い。

蒼くなりきれない空を眺めていると、ほんの少しだけ田舎の空気が懐かしくなる。だがそれもしばらくのこと。

こちらの大学に入ってから、地元へ戻らずそのまま就職して四年。

二十六歳ともなればいろんなものに諦めがつき、様々な不都合から目を逸らして生きることにも慣れてきた。

たとえば都会の喧噪けんそうだとか、明るすぎる夜だとか、その割に暗い住宅街の片隅から突然現れる人影や通り過ぎるパトカーのサイレンだとか。

そういうものを差し引いてもここから離れられない理由は、多分この先にある巨大施設、羽田はねだ空港から飛び立つ飛行機への憧れだろう。

また一機、両翼についたエンジン音を響かせ頭上を過ぎていく。  
機体を見送りつつ、理沙は思う。

特段優秀な大学を出たわけでも首席を取ったわけでもない自分が、就職浪人もせずにこのSGJ——スカイ・ガーディアン・ジャパン航空に就職できたのは幸運なことだ。

もちろん、就職活動は簡単ではなく、履歴書を書いた数は三桁に近かったし、面接で人間性を否定されるような質問を受けたこともある。

傷つき、地元に戻ろうかとか、希望を諦めようかとか考えたことは何度もあったが、それも遠い昔。

たとえ配属された部署が、ほとんど航空と関係のない機内誌編集部だったとしても、空——というより、海外に関わる仕事ができることは嬉しいものだ。

首都の上で大きく弧を描いて、彼方へ飛んでいく飛行機を見るたびに思う。  
いつか、憧れだけではなく実際に海外へ行ってみたい。

大学で学んだ英語の技能を活かして働きたいとか、趣味で勉強している外国語が通じるか試すため留学したいとか、そんな大それたことではなく、ただ単純に、ここではないどこかへ行き、新しい世界を見てみたいと思うのだ。

（ただ、まあ……当分、先になるだろうけれど）

お金は節約して貯めていけばいいし、外国語を学ぶのも楽しいのだが、理沙にはまた別の問題——外国人の男性が苦手という問題がある。

挨拶したりすれ違う分には平気なのだが、親しげに声をかけられたりするとつい硬直してしまう。理由はわかってはいるし、もう昔のことだと頭で理解してもいるのだが。

（気の持ちようが弱いつて言えば、そうなんだけど）

そんなことを考えながらお弁当の中身をつつく。

つい溜息を漏らす理沙とは逆に、両耳にはめたワイヤレスイヤホンからは、少しだけ早口で、イ

タリア語なまりの日本語が聞こえます。

——チャオ、リスナーの皆さん。こちらヴェネチアは早朝四時。といってもあと数日でサマータイムになりますけどね。ははは。

若い女性が朗らかに日本語で語り、その後イタリア語で同じ挨拶が続く。

日本の昼休み時間を狙ってネットでライブ配信されるこの放送は、国際結婚でイタリアに移住した女性が配信者をしていて、現地での日常の出来事について語るといふもの。

端切れのいい日本語と、ゆっくりとセンテンスを区切って発音されるイタリア語を交互に話すことで、楽しみながら語学学習ができるため、理沙のお気に入り番組でもあった。

機内誌編集の仕事で現地のスタッフとやりとりすることも多いので、普段から外国語は積極的に学んでいる。フランス語や中国語は、レストランの予約といった日常会話程度ならできる。いずれ必要になるかもと今はイタリア語を趣味で勉強中なのだ。

（今日も絶好調だな。すごく楽しそう）

窓際に飾ろうと思っていたベゴニアの花を水のやりすぎで枯らしてしまったとか、最近できた酒屋に入っていたワインが美味しかったとか、そういうごく普通の暮らしについて小気味よく語られるうちに、落ち込みかけていた気持ちが浮上し、弁当をつつく箸の運びも早くなる。

単純だな、自分——と苦笑しつつ目を閉じれば、まぶたの裏に浮かぶのは見知らぬ外国の、蒼く遠い空と見晴るかす地中海の波と太陽。

手を伸ばせば、現地に実っているレモンやオレンジに手が届くのではないかと思えるほど、リアルに想像力を働かせつつ放送に聞き入っていると、リスナーの女性が先週末に行ったハイキングの話題を語る。

ローマ時代の水道橋と温泉浴場の遺跡を見に行ったこと。そこには沢山の落書きがあつて、仕事がかッといとか嫁姑の対立だとか、今と変わらない愚痴に笑ってしまったこと。

そして。

——こんな言葉を見つけました。“si vis amari ama、ラテン語で“愛されたければ愛しなさい”という意味です。これは哲学者セネカの言葉で——。

続く解説が急激に遠のき、理沙が見ていた架空のイタリアの情景がかき消える。

「……シ・ヴィス・アマーリ・アマ」

先ほどの配信者の言葉を知らず繰り返していたが、声にした理沙だけがそのことに気付いていない。

——愛されたければ愛しなさい。

素敵な、だが残酷な言葉でもあると思う。

いくら愛を注がれても、愛を返せないこともあるだろう。

たとえば、自分が過去にされたストーカー行為のような一方的な感情に、応えられるかといえは多分無理だ。

どころか、その時のことがトラウマで、今でも男性——とくに外国人の男性が苦手なぐらいだ。そんな自分が人を愛し、愛されることなどあるのだろうか。

二十六歳、まだまだ先の話と思うが、同期の子が結婚したただの出産したただのという話が始めていて、そこに乗れない自分に焦りを感じてもいる。

かといって、仕事があれば恋愛なんてと振り切ることもできず、中途半端な立ち位置のまま、将来が見えないことから目を逸らし、目先の現実だけをこなし生きている。

突然、虚しさに襲われ溜息をついた理沙は、だが、まだ午後の仕事があることを思い出し大きく息を継ぐ。

「シ・ヴィス・アマーリ・アマ」

先ほどよりはつきりとした声で、ライブ配信で流れた単語を口にする。

——まずは自分が行動しなければ。

いつまでも怖がついては先に進めないのだと、己に言い聞かせることで、過去へ引きずられそうになる気持ちを留める。

目を閉じたままぐつと顎を上げ、薄くまぶたを開いた時だ。

「愛を欲せばまず愛せ」

低く、耳に心地よい男性の聲がそばから聞こえてきよつとし、思わず肩を跳ねさせる。弾みではめていたワイヤレスイヤホンが左耳から転げ落ち、理沙は目を見開いた。

顔にかかる影の大きさにまばたきし、その輪郭から男性が前に立っているのだと理解した次の瞬間、鼓動が止まった。

(う、わ……)

光と闇の揺らぎに目が慣れ、男性の姿がクリアになった途端、理沙は思わず感嘆の吐息を漏らす。わずかに角張った頬骨とはつきりした輪郭。

中心に通る鼻筋は高く、墨で引いたような眉は太いけれど綺麗に整っている。

肉厚で引き締まった唇はわずかに端でつり上がっていて、男の意志の強さと揺るぎなさを印象づける。

目は一重の切れ長で、まるで伶俐なナイフのように鋭く研ぎ澄まされており、ただ者ではない空気を醸し出している。

血管と喉仏が浮いた首は太く長く、そこから続く肩幅はがっしりしていて、男が身につけている三つ揃えのスーツに包まれた胸板もほどよく厚い。

座っていないとも見上げるほど身長は高く、彫りの深い顔立ちと相まって日本人離れして見える。圧倒的に雄を感じさせる容貌だが、造作の一つ一つが端麗であるためか粗野な感じはなく、それどころか知性に裏打ちされた野性味を引き立てて艶容な色気を醸し出している。

年の頃は理沙より一回り上か、それより少し若い——三十代後半ぐらいだろう。

しかし、そうとは思えないほどの威容と存在感に溢れていた。

まるでファッション雑誌から抜け出してきたような男の容貌に、度肝を抜かれぽかんとしていると、そんな理沙の表情がおかしかったのか、男はくすりと小さな笑いを漏らす。

理沙から凝視されているのに恥じらいもせず、かといって鼻にかける様子もない。

ごく自然体で佇む様子は、人から見られ慣れている——もつと言えば、他人から驚嘆や羨望の眼差しを注がれることが当たり前すぎて、気にも留めなくなつたような余裕があつた。

男の鷹揚な態度を前に、自分が不躰な視線を送っていることに気付いた理沙は、羞恥から頬を赤くする。

「すつ、すみません」

顔を紅潮させつつ俯くも、男はまるで気にしない様子で続けた。

「セネカの言葉だね。……自社の屋上で耳にするととは思わなかったが」

恥じ入る理沙の気をほぐしたいのか、冗談とも取れる口調で告げられ、そこで初めて男が同じ会社の——スカイ・ガーディアン・ジャパン航空の社員なのだと気が付いた。

「申し訳ありません、変なことを口にして」

「別に。咎めているわけじゃない。……むしろ逆だ。久々にラテン語の響きを耳にして嬉しくなつてね。いきなり声をかけて驚かせたのならすまない」

落ち着いた、大人の男らしい声に胸を高鳴らせつつそろりと視線を上げる。

チャコールグレーの、目の詰まった高そうな生地でできたスーツが見え、次いで白いポケット

チーフを覗かせた胸元と、金色の社章を飾った襟が続き、理沙は知らず息を詰める。

（うわつ、まずい。重役だ）

平社員はスカイブルーと白のコーポレートカラーを塗布した社章をつけるのに対し、パイロットと客室乗務員は銀色にクリスタルガラスの星を飾った社章を、部長以上の役職は金色の社章を辞令とともに渡されることを思い出す。

知らず喉を鳴らし唾を呑んでいると、男はわずかに肩をすくめて苦笑した。

「萎縮しなくてもいい」

「はあ」

そうは言っても、理沙のような平社員は、重役クラスと面と向かって話すことなどまずない。

年末の納会と年度初めの部会で、その他大勢の中の一人としてありがたく訓示を聞くぐらいだ。

秘書課や経営企画部のように、航空会社の運営に深く関連する花形部署ならともかく、機内誌を編集する部署は部と名がついているものの、編集部長は広報部長と兼任な上、所属する社員を束ねる編集長は課長級ではない。

入社式で辞令を渡された時から数えて数年ぶりという重役との対峙に、どう接したらいいかためらっている、彼はふと理沙から視線を外し遠くを見る。

なにを——と気になり彼の目線を追えば、たつた今、羽田空港を飛び立つばかりのスカイ・ガーディアン・ジャパン航空の旅客機が視界に入る。

「あ……」

エンジン<sup>エンジン</sup>の轟音を響かせ空に飛んでいく機体を見ると、男が独り言じみた様子で呟いた。

「西航路、……ソウル行きか」

「わかるんですか」

真昼の空は澄み渡っており、夜のように北極星や星座といった指標となる印はない。なのに当然のように飛行機の行き先を口にしたことを驚きつつ尋ねる。

すると彼はくすりと笑って目を細めた。

「滑走路から飛び立つて上昇する角度と旋回の大きさを見れば大体ね。ひよっとしたら仁川<sup>インチョン</sup>かもしれないが」

隣国にある国際ハブ空港の名をさらりと口にする様子に再度驚き、理沙は目を瞬かす。

すごいな、重役ともなれば飛行機を見ただけで行き先がわかるようになるのか、などと考えていると、彼はまた顔を理沙へと戻し尋ねた。

「なるほど、いい発音をしていると思ったら機内誌編集部<sup>機内誌編集部</sup>の社員か」

「えっ、あっ……！」

どうしてわかったのかと驚き、次いで、胸から下げていた社員証を見られたのかと思い当たった。あわてて手で隠すと、彼は首を傾げて苦笑する。

（あ……優しい表情）

目尻が下がり、鋭い印象が途端に和らいだことに對し、そんな感想を抱いていると、彼はのんびりと言った。

「別に取って喰わないよ。……そんなに怖いかな」

どこか面白がる様子に、頬がますます熱を持つ。

怖いというより恥ずかしい。思わず口にした独り言を聞かれてしまうなんて。

だけどそれを伝えてよいものかどうかともわからず、理沙は食べかけのお弁当にあわてて蓋をして立ち上がる。

「も、申し訳ありません。突然のことで驚いて。ええと、あの……し、失礼しました」

傍らに置いていたトートバッグに包んだお弁当を突っ込むやいなや立ち上がり、理沙は頭を下げてたまた小走りで男の横をすり抜ける。

その行動のほうがよく、ぼど失礼に当たるかもと頭をよぎったが、それよりも羞恥と男性の存在感にあてられ逸る心が勝っていた。

逃げるように屋上庭園を抜け、誰もいないエレベーターへと飛び込む。機内誌編集部があるフロアのボタンを半ば習性のままに押すと、理沙は下降しだしたエレベーターの壁に背を預けて溜息をつく。

「びっ、くりしたあ」

重役に鉢合わせるのも珍しいが、あんな印象的な男性を目の前にするのも初めてで、もう、どう

していいのかわからない。

そもそも男性がやや苦手で、初対面では相づちを打つしかできなくなるくらいなのに。

(でも、あんな人、重役にいたかな……)

機内誌編集部は社外の取材の社内窓口も兼務しているので、経済誌から取材を希望されたりすると、秘書にスケジュール調整の依頼をしたり、重役のプロフィールや写真を揃えたり、時には取材に立ち会ったりすることもあるのだが、先ほどの男性を目にしたことがない。

他社から引き抜かれて来たのかもしれないが、それにしても珍しいと思う。

というのも今は三月の半ばで、本格的な人事異動の時期までまだ少しある。進学や転勤などで人の移動が多くなる三月は航空会社にとって繁忙期で、その時期にあえて人を動かすなど珍しい。

理沙が把握していないだけかもしれないが、それにしてもあれほど目立つ人材だ。

(噂ぐらい、耳にしてもおかしくないのに)

——などと考えつつ、部署のドアを開いて自分のデスクへと戻る。

すると、椅子に座るか座らないかのうちに横から声をかけられた。

「いつもより、十分早く戻ってきたんだ」

ぎくりとすれば、隣の机で顔を伏せて眠っていた男がニヤニヤ笑いつつ身体を起こす。

同僚——というより、半年前から派遣社員としてやってきた瀬川だ。

(相変わらず唐突な人だなあ)

湧き上がる苦手意識を抑えつつ理沙が愛想笑いで応じると、彼は額に浮いた寝汗をよれたワイシャツの袖で拭った後で、大きく伸びをする。

「へえ、仕事片付けて出たのに、わざわざ早く帰ってきてくれたんだ。へえ」

妙に意味深で持つて回った言い方をされ、気が怯む。

瀬川は二浪して大学を卒業した後、ここスカイ・ガーディアン・ジャパン航空のグループ内にある人材会社に採用されたと聞く。グループ内を点々としてから、昨年の秋からここ機内誌編集部に派遣されたが、あまり評判はよくない。

というのも、羽田という二十四時間空港への取材や海外にいるライターとやりとりする都合上、編集部員にはフレックスタイムでの勤務が適用されている。

しかし、それをいいことに瀬川はとくに必要もないのに午後から来たり、月一の定時勤務日に遅刻しても平然としていたり——。

それだけなら、同じことをやらかす社員もいるので目立たないが、瀬川の場合はなにぶん頻度が多く、その上、間に合わなかった仕事を周りに——とくに理沙に——を押しつける。

駄目押しに、セクハラギリギリの発言に加え、よくサボっては資料室で昼寝する始末で、まるで真面目に働く気がない。

だったら契約を解除すればとも思うのだけれど、なんでも子会社の重役子息だとかでいろいろ面倒な人間関係があると聞く。



（だったら仕事を取らないでいてくれればいいのに）

と理沙は思うが、変な見栄だけはあるらしく、上役の前では進んでやりますやりますとアピールにもかかわらず、最後まで責任を持つてやり遂げることはない。部署で一番の若手で、男性にあまり強く出られない理沙の机に書類を積んで、「水谷さんに任せたのに間に合いませんでした」と上司に言い訳するのだから、手の施しようがない。

仕事が忙しくてさあ、とか、上から期待されるのも楽じゃない、だとか、本人以外誰も取り合っていない雑談を右から左へ聞き流しつつ、スリープ状態だったパソコンを立ち上げ理沙はぎくりとする。

——いつもより、十分早く戻ってきたんだ。

理沙は昼休憩に入っても規定より十分早く席に戻ってくる。

が、今日は屋上で予期せぬ出会いがあったため、それよりさらに十分早く——つまり昼休み終了二十分前に戻ってきていた。

機内誌編集部員はフレックス勤務で、当然、昼休みに入る時間もバラバラなのに、瀬川はどうして理沙が戻ってきた時間が十分早かったと知ったのか。

（いや、同じ時間帯にランチに入っただけ……だよ）

偶然だ。そう自分に言い聞かせたいが、以前もこんなことがあったのを思い出す。

たとえば外出から戻ったら会社の入口に瀬川がいてお茶に誘われたとか、珍しく外にランチに出

たら彼もいたとか。

一度などは、部署の飲み会の帰りにまるで方向が違うのに理沙が乗るタクシーに同乗しようとしてきた。

酔っぱらっていたのもあるだろうが、妙に馴れ馴れしくてしつこかったのを思い出す。

その時は別の女性社員が間に入ってくれて事なきを得たが、あの時、瀬川と二人きりで帰るハメになったら、家を知られたらと思うとぞつとする。

会社も部署も同じなため、行動範囲や時間が似通うのは仕方ないが、それでも理沙は、自分の行動が把握されていたことに対する気持ち悪さを拭いきれずにいた。

「ふうん、そんなことがあったんだ」

日替わり定食のピラフを口へ運びながら、親友の水田千紗みずた ちさは苦笑する。

「久々にこつちに来たけど、なんか大変だねえ」

二人は大学時代からの友人で、飛行機部の歓迎コンパで知り合った。

飛行機好きな千紗と海外に憧れがある理沙はすぐに仲良くなり、就職も同じ会社になった。

二人は、水田と水谷、千紗と理沙——と名前が近く、名前順でグループが組まれた新入社員向けの研修でも一緒であったため、自然と付き合いが深くなり、今ではなんでも話せる数少ない女友達の一人だ。

「そうだよ。今週に限って、中国とかフランスから部署の間違い電話が多かったし」  
疲れからつい溜息をついてしまう。

日頃からテレビの語学講座やレッスン系動画で勉強していたので、なんとか相手先に繋がたし、その後、苦情もなかったので安心できたが、気が張ったのは確かだ。

「しかも、瀬川さんは昼休み終わってもずっと雑談してくるし、その割に、面倒で手がかかる仕事はこっちに押しつけてくるし」

屋上で独り言を重役に聞かれてから一週間、理沙は気まずさと恥ずかしさからなかなか屋上へ足を運ぶことができず、編集部で昼ごはんを食べていた。

それが珍しかったのだろう。いつも昼休みは寝ているかスマートフォンでゲームをしているかの瀬川が、しきりと理沙に話しかけてきて、しかも今日などランチに誘われてしまった。

社食で、どこに本人がいるかわからないため小声で愚痴る。

「運よく先に千紗がランチの予定を入れてくれたから助かったけど、今日も雑談ばかりつてなると編集長に睨まれて、小言を喰らうんじゃないかってこっちはヒヤヒヤ」

「ははは。それはそれは。よかったね、私が研修で」

普段、千紗は本社ビルではなく総合訓練施設という、客室乗務員やパイロットが訓練を行う施設に勤務している。

とはいっても千紗は客室乗務員ではなく、その成果をチェックしたり、訓練用の機材のスケ

ジュールを管理したりする、訓練審査部の所属だ。

今日は半年に一度のコンプライアンス研修だとかで本社ビルに来ており、よかったら朝に誘いを受けたのだ。

「でもさ、せっかくなら社食じゃなくてカフェとか、ちゃんと調べて一緒に行きたかったんだけどねー」

「ううん。社食でも充分。久々に明るいうちに千紗と話せて嬉しいよ」

「へへへ。そう言われるとくすぐりたいな。でも本当だねー。仕事帰りにはよく飲みに行くのに、社内ではなかなか会わないもんね」

おどけた仕草で日本酒のおちよこを傾ける仕草をし、一拍置いて千紗は身を乗り出してきた  
「それはそうと、その屋上の謎の男性。……ひよっとしたら御門守慎機長じゃないかな」

周囲をはばかるような千紗につられ、理沙まで身を乗り出しつつ声のトーンを落とす。

「え？ 機長……じゃなかったよ。社章が金色だったし」

そう言う千紗は左右を見渡し、さらに小声で耳打ちする。

「正確には『元』機長。しかも最年少機長だった上、車輪トラブルからの胴体着陸を成功させた社内英雄。……知らないの？」

広報部に属する機内誌編集は、新聞記者のように思われがちだが、実際には海外の旅行雑誌編集に仕事内容は近い。

その上、大学でストーカー被害にあってから人見知りとなった理沙は、社食に顔を出すことは稀で、合コンへの参加からも逃げまくっているため、とにかく社内の噂にうとい。

「そんなに有名な人なの？」

思い当たらず首を傾げると、千紗がしょうがないなあという風に眉の端を下げ、食べかけのピラフを脇に避ける。

「有名も有名。……経歴は超がつくエリートコースな上、創業者一族。たしか三十八歳だったかなで、今の社長の甥っ子」

なるほど。だとすれば、あの屋上で見せた存在感と人に見られ慣れている所作にも納得がいく。パイロットだったなら空港を歩いているだけで、お客さんから記念に写真をと願われることもあるだろう。

加えて創業者の系譜——いわば御曹司。

駄目押しにあの外見とくれば、注目を浴びるのは日常だろう。

イケオジというには若いのが、イケメンというほど軽くない。大人の男としての成熟と落ち着きを漂わせる男性——。

そんなすごい人の前でつたないラテン語を知らず呟いていた自分に理沙は赤面する。

「社長の甥っ子さんかあ。それで重役って……あれ？ でも機長と兼任してるわけじゃないよね」  
重役であることもすごいが、機長はまた別格だ。

両者の仕事はそれぞれに多忙な上、業務内容がまったく異なるため兼任できるとは思えない。すると理沙の予測が正しいという風に、千紗がさらに声を潜める。

「操縦資格欠落……というか、病氣療養中っていうのかな。……なんか病気で視角が狭くなってるらしいよ。といっても二度程度で普通の人だったら気付かないぐらいなんだけど」

乗務前の身体検査で見つかって、万が一のため治療が完了するまではと、自ら乗務を——パイロットであることを——辞したらしい。

「私からすればどこが悪いんだろうっていうぐらい、定期訓練やシミュレーションの成績は変わらず抜群だったんだけど。まあ、責任が重い職業だし、なにより本人たつての希望とかで……、搭乘しなくなっただけは一年ぐらい経つかなあ」

ああ、だからラテン語の響きが懐かしいと言ったのかと納得しつつ、冷め切ったパスタをフォークに巻き取る。

が、口に運ぶ気になれず動きを止めたまま理沙は黙り込んでしまう。

それが続きを待つ姿勢に見えたのか、理沙はさらに続けた。

「最初は地上勤務をしていた、その後、あちこちの部署から熱烈ラブコールの嵐で、人事と社長が頭を抱えていたらしいんだけど。……そこはね、会長の鶴の一声で、一年だか二年だかで治療が終わるなら、その間は社内で役職について経営を学ばせてから、また空に飛ばせばいい」って」

「ああ——」

会長は破綻寸前であつた航空会社を買収し、一代で安定経営に導き、さらには海外就航への道筋をつけた手腕を持つ。その上、人間的魅力の高さと豪胆な性格が有名で、息子に社長の座を譲つた今も大きな影響力がある。

「末っ子が産んだ初孫とかで、とかく気に入られてるって有名で、パイロットになつた時はそりやもう周りが呆れるぐらいはしゃいでたとか。だから、このまま『元機長』で終わらせるのはおしいんだろうね」

ピラフ定食の付け合わせのコンソメスープで口を潤す千紗に、理沙は納得しつつやや不安になる。「でもいいの。そんなこと話しちゃって」

同じ会社内でも部署が違えば守秘義務というものがある。

とくにパイロットの機体操縦を審査する部署にいる千紗は口が硬いと思つていたのだが。

「話すものにも、社内で知らないほうが変わってぐらい知られてる話だし」

あつさり肩をすくめられ、自分の人付き合ひの狭さを知つた理沙は赤面してしまう。

機内誌とはいえ編集を担当している身。情報にアンテナを張つていないとやっぱ駄目だなと内省していると、千紗があつと小さく声を上げた。

「噂をすれば、ほら」

指を差されるまま理沙が振り向けば、食堂の入口付近がにわかに騒がしくなっている。

心なしに周囲の注目もそちらと注がれている気がし、理沙は好奇心がくすぐられるまま軽く身を

乗り出し先を見る。

と、制服を着たパイロットが三人と、今まさに話題にしていた御門守元機長が談笑しながら、食堂へと入つてくるところだった。

「うっわ……」

目にしただけで周りが騒ぐのも納得だ。

ビシッとした制服姿のパイロットだけでも目立つし、女子の注目を集めるというのに、その中に御門守までいるのだ。

今は機長でないため、出会つた時と同じダークブラウンのスリーピーススーツ姿だが、それでパイロットたちに囲まれていてまったく見劣りしない。

それどころか、周囲のパイロットが若手——多分副操縦士——ばかりなこともあつて、御門守には威厳にも似たオーラが漂つて見える。

さながら獅子の群れのリーダーと若獅子といった集団は、周囲から注がれる羨望や恋情の視線をものともせず、悠然と歩きながらオーダーカウンターのほうへと向かつていた。

(すごい人に変なところを見られちゃったなあ)

溜息について席に座り直し、理沙はどこか上の空でナポリタンをくるくるとフォークに巻き付ける。

圧倒的存在感だ。まるで一流芸能人かなにかのよう。

いや、空に憧れる者たちにとつてはパイロットは王者も同然だ。

敬意を抱くのは当然だし、社会的地位もあり、高収入。しかもなぜかイケメン揃いな彼らに女性達が揃って焦がれるのも当然だろう。

裏方の事務職員たちは遠巻きに眺めつつ羨望の溜息をついている。

一方、華やかな客室乗務員や、われこそはと自信を持つ美人グランドスタッフたちは、ここ一番の笑顔を浮かべ、彼らに視線を送る。

だけど理沙はどうしても、彼女たちのように目に留めてもらいたいとは思えなかった。

確かに御門守も、彼の周囲にいるパイロットたちもすごい人だと尊敬できる。

けれど自分が彼らと釣り合うようにも思えないし、無理して釣り合おうとも思わなかった。

（見ている分には平気だけど、やっぱり、付き合うとなると男の人が怖い。それもこの年になってどうかと思うけれど）

自分で自分が情けない。

そんなことを考えていると、近くにいたパイロットからなにか言われた御門守が、誰かを探そうにぐると食堂中に視線を巡らす。

周囲から興奮した声が上がリ、目が合ったかも、との台詞も聞こえる。

そんな中、騒ぎにかまわずパスタを口に入れていると、女性らのざわめきがどんどん大きくなってきた。

大げさじゃないかなと呑気に思いつつ顔を上げた理沙は、その瞬間、目を見開き固まってしまう。お疲れ様ですと周囲からかけられる声へ鷹揚（わうよう）に対応しつつ、御門守がどんどんこちらに近づいてきていたからだ。

（どっ、どういうこと！）

一瞬で頭の中がパニックになる。

屋上で出会ってから一週間。その間、部長として、また、スカイ・ガーディアン・ジャパン航空の顔として、多忙を極めている御門守が、機内誌編集部という小さな部署の中に引きこもっていた理沙を覚えていたとは思えない。

いや、仮にやりとりを覚えていて変な社員だと思われていても、顔までは覚えてないだろう。だとしたらなぜこちらに来ようとしているのか。

（えっと、なにか失礼なことをしたかな……って、失礼なことしかしてない気がする！）

いきなり声をかけられたこと、独り言を聞かれてしまったことに驚いて、返事どころか挨拶もせず逃げたことが頭をよぎる。

そのことに関して注意しようという気なのだろうか、背筋に冷や汗を伝わせていると、当の本人である御門守は、理沙と千紗が座る二人がけ用テーブルの前に立って笑顔となる。

無邪気な少年のような他意のない表情に、つい見蕩れた時だ。

「こんなところで会うなんて珍しいね、水谷君」

水田と言われた気がして盛大に肩をびくつかせたが、すぐにそれ自分ではなく千紗の苗字だと気付いて苦笑する。

と同時に理沙は内心で胸を撫で下ろす。

年に何回か掲載されるインタビュ以外でパイロットに接することなどまずない理沙と違い、千紗は毎日、訓練と航空機免許習得のための計画研修——シラバスと呼ばれる——に訪れる彼らと顔を合わせるのだ。知り合いなのも、声をかけられるのも当然ではないか。

「いつも天空橋てんくうばしのほうにいるから、なんだか新鮮だよ」

総合訓練施設がある地名を挙げつつ首を傾げる御門守に対し、千紗は食事の手を止め、両手を膝においてから口を開く。

「はい。今日はコンプライアンス研修です。……そういう御門守機長も、食堂を利用されるのは珍しいのでは？」

千紗はどこか緊張した表情で、「いつも外に出ていらつしやいましたよね」と続け、突き刺さる周囲の女性の視線にも気付かない様子で、御門守に付き従う若手パイロットたちをちらと見る。

「ああ。今日は相談ごとがあると後輩から言われてね。それと、今はもう機長じゃないよ」

茶目つ気たつぷりに片目を瞬かせつつ千紗の間違いを指摘すると、千紗はしまったという風に視線を逸らしてから頭を下げ訂正する。

「失礼いたしました。御門守部長」

「お互い、慣れないね。……それより、来週あたりにまた訓練シミュレーターを使いたいんだが。機体はトリプルセブンで、出発は羽田ふぐたか福岡あたりの混む処から、到着はドゴールで頼みたい。大丈夫かな」

トリプルセブンは多分ジャンボジェット機のこと、ドゴールはフランスのシャルル・ド・ゴール空港のことだろう。

腕が落ちないように訓練だけはしているのかなと、なんとなくしに二人の会話を聞いていると、一拍置いて千紗が返答する。

「副機長が多加良たからコーパイでなければ」

さりげなく水を吞むことで、話を聞いてませんよのアピールをしようとしていた理沙は、無礼な千紗のいいぶりに思わず取ろうとしていたコップを倒しかける。

あわてて両手で握りしめ、呆氣にとられ千紗を見れば、まるで敵でも見るような目で御門守を——というより、彼のすぐ斜め後ろに立っていた青年パイロットを睨んでいた。

「嫌われたものだね、多加良君も。……わかった。副機長は別の者にするから、セッティングのほうはよろしく頼むよ」

どこか険悪な空気が漂う中、まるでそれに気付いていないような、いや、気付いていて楽しむような雰囲気を見せつつ御門守はきびすを返す。

よかった。屋上でのあの出来事は覚えていないみたいだ。

独り言を聞かれるという黒歴史を忘れられていたことに対し、安堵と理由のわからない虚しさが胸をよぎった時だ。

「ああそうだ。君」

御門守が、足を止めて肩越しに振り返る。

まだ千紗に用事があるのだろうかと思つて顔を上げれば、真つ向から彼と視線が合い、理沙は飛び上がりそうになった。

「変わった口紅をつけているね」

「へ？」

話題の飛躍についていけず理沙はぼかんとしてしまふ。すると、その様子が面白かったのか、御門守はくすぐすと小さく笑つてから続けた。

「悪くはないが、ナプキンで取つたほうがいい」

そんなに変な化粧をしていただろうかと不安を抱きつつ、自分がしているメイクを振り返る。

（スキンケアとファンデーション以外は、全部プンプラ品だけど……量産品だから変な色つてわけでもないはず、だけど）

ベースとなる顔だつて、特別に美人でもない代わりに話題になるほど変でもない。たとえるならその他大勢。いわゆるモブ顔という奴だ。

両親が揃つて南の出身なのに、どうしてか理沙だけ肌が白く、髪も黒というより焦げ茶と栗色が

混じつたシマリスみたいな色合いだが、悪目立ちするほどのものではない。

髪型も客室乗務員の女性たちの凝つた夜会巻きとは真逆に、首筋の後ろで一つに束ねて流しているだけ。しかも緩いくせつ毛のため毛先でくると跳ねている始末。

鼻の高さも唇も大きすぎず小さすぎずで、目と眉だけが端下がりなため、どこか気弱で困り顔に見えてしまうのが悩みどころ。

美点といえば瞳がやや大きく、涙腺が緩いせいで、いつも濡れて艶めいているところだが、それだつて、人によつては「すぐ泣きそう」と見られる。

つまり、どこをどう見ても「普通」でしかないのだが。

（さりげなく失礼なことを言う人だなあ……）

機長でなくなつた今も、後輩パイロットから相談を受けるほど人望があるのだから、誠実でいい人なのだろうと思ひ込んでいたのに、なんだか裏切られたみたいだ。

勝手に想像して勝手にがっかりするのも失礼だが、気持ち<sup>しお</sup>が萎れるのはどうしようもない。

結局、この人にとつても、他の人にとつても、自分はどうでもいいその他大勢の一人なんだろうな、とうなだれかけた時だ。

予告もなく御門守の手が伸びてきて理沙の頬を包み込む。

突然肌を覆つた手の大きさを、そこから放たれる熱に驚き目を見開けば、御門守が真つ直ぐにこちらを見つめていて、心臓が大きくどくと波打つ。

「あ、の」

状況がわからず声を震わせ、ただ自分を見つめる御門守に見蕩れていると、彼がふわりと表情を和らげた。

全身がわななくように震えると同時に、顔が一瞬で上気する。

振り払えばいいのか、それとも、振り払うのは失礼かと混乱していると、そんな理沙を見ていた御門守が親指をそろりと唇の端へと滑らせ——少し乱暴にぐいと、肌を擦られた。

「ケチャップ」

親指をたてて、そこについた赤いソースを見せつける。

「ッ……」

ものすごい勢いで血が頭に上り、顔どころか耳やうなじまで真っ赤になっていくのがわかる。

（せっかく、御門守部長が遠回しに指摘してくれたのに、言葉通りに受け止めて、ケチャップのついた間抜けヅラを周囲に晒していたなんて！）

独り言を聞かれる以上の失態に、黒歴史の上塗りだと内心で頭を抱えていると、御門守は理沙の懊惱<sup>おうれう</sup>を楽しむように目を細めた。それから周囲が嘩然とするのもかまわずに、ちゅっ、とリップ音をたてて理沙の口元を拭った親指に唇を当てて吸う。

キヤーツと遠くのほうで女性が悲鳴をあげざわめきでしたが、理沙にとってはそれどころではない。

（端とはいえ唇についていたケチャップを拭った指を！ 間接キスも同然でしょ！）

しかもわざわざリップ音をたて、目を伏せがちにする御門守は、真昼の社食だということを忘れるほど色気立っていて、男性と付き合ったことすらない理沙には刺激が強すぎた。

口から魂が抜けていくような心地に陥っていると、向かいの席で一部始終を見ていた千紗がわざとらしい咳払いを響かせる。

「御門守きちよ……いえ、部長。それはセクハラです」

「そういえばそうか。すまない。親戚の子によくやっているので、つい癖になっていたようだ」  
なんのてらいもなく返されたが、半分以上嘘のような気がするのは自意識過剰なのか、それとも御門守の色気がそう見せてしまうのか。

「嫌な気分にしたなら申し訳ない、水谷君」

部長という偉い立場の人から礼儀正しく腰を折られては、かえってこちらが恐縮してしまう。  
「いえ、あの、……だ、大丈夫ですから。その、お気になさらないで、くだ、くだしい」

うろたえたあまり舌が絡んで、三歳児みたいな物言いになってしまい、あわてて両手で口を塞ぐと、それまで張り詰めていた周囲の女性らの気配が途端に緩み、小さく吹き出したり、あの子どもつぼさでは無理もないという風な囁きが耳に入りだす。

（うう、恥ずかしい。しかも子ども扱い）

居たたまれなさに目を閉じていると、御門守が背を向け去っていく気配がした。



「やっぱり、私もナポリタンにしよう」

「御門守部長、今日はカレーにすると言っていますでしたか？」

「いや、案外うちのケチャップソースも美味しいものだなと」

「そうですか。じゃあ俺もそうしようかな」

そんな風に周囲のパイロットと雑談する声が遠ざかり、食堂がいつもの空気を取り戻していく中、千紗が遠い目でぼやく。

「これは当面、女子社員の間では食堂でナポリタンを食べることが流行りそうね……」

そんなに影響力がある人物から関わられ、光栄どころか恐縮でしかないし、いつそ穴を掘って埋まりたいぐらいだ。

「私、やっぱり来週から屋上で食べるわ」

ようやく顔を上げた理沙はバスタのレーンに並ぶ御門守の背中を見る。

「そうしたほうがいいかもね……」

ひょっとしたらまた御門守に遭遇してしまうかもしれないが、人の目がない分、食堂よりむしろ刺すように視線を投げてくる女性社員の存在にうんざりしつつ、理沙はフォークを置いた。

できれば、今後、もう関わることはありませんようにと願いながら。

だが、理沙は騒動に気を取られるあまり気付いていなかった。

御門守が、去り際に「水谷君」と理沙の苗字を口にしていたことに。

## 2.

「部署異動！」

予想もしなかった課長の話に、理沙は思わず素っ頓狂な声を上げてしまう。

六月が人事異動のメインとなっている会社なのに、三月、しかも四月まであと一週間しかない中で唐突に、内示もないまま辞令が下りていて理沙は啞然とするしかない。

「いや、部署異動だったって、産休の代打だから半年から一年、まあ長くて二年ぐらいかな。社内の異動だから転勤もないわけだし」

編集長にとっても寝耳に水だったのか、ハンカチで汗を拭きつつそう言われたが、なるほど納得できる話でもない。

（どうしてこうなったの？）

朝起きて、普通に支度して出社した。

満員のモノレールに揺られながら見た今日の占いはトップで、偶然にもラッキーカラーであるベージュのブラウスを着ていて、よしと気分も上がっていた。

なのに、朝一番にミーティングルームに呼ばれたかと思えば、部署異動命令である。

口を開けてばかんとするしかない。

それでもと気を取り直し、理沙は口を開く。

「社内で産休の代打というと、総務とか運行支援ですか？」

「いや、さすがに未経験者にコントはさせないと思うよ」

コントとはお笑いではなく、コントロラーという業務指揮のことだ。パイロット、客室乗務員、グランドスタッフの各役割から数名ずつ出て、チームごとに無線指示を飛ばす役割を意味する。

じゃあ、一体どこなんだろうと首をひねれば、とんでもない単語が耳に入った。

「航路開発部だよ」

「航路開発！」

思わず繰り返してしまうほど意外だ。

航路開発部とは、飛行機の就航や減便を選定するところで、経営に直結する花形部署。

配属されるのは語学堪能で交渉上手な者ばかりで、出世コースの一つと目されている。

そんな場所に、特別な能力があるわけでもない自分がなぜ、と目を瞬かせていると、編集長は今天だとはかりに身を乗り出して説明しだす。

「いや、栄転だよ、これは！ 経営に直接関係する部署で世界中の空港に関係する業務を行えるんだよ。他の社員よりも先に！ なに、心配しなくても、やることは補佐だから電話番号とメールの要約が中心らしい。君の成長のためにもいいと思うんだ。うん」

そこでひと息つくと、編集長はいきなり声を潜める。

「希望者はいっぱいいたんだけど、条件が合わなかったらしい。で、部長から直々に君にどうかって打診があつてね。こんなことなかなかないよ、シンデレラだよ！」

意味がわかってるのかいないのか、やや興奮した面持ちをして理沙を見つめる。その目は少年のようにキラキラしていて、嫌ですどころか、考えさせてくださいとも言えない雰囲気だ。

「まあ、あそこの部署はアレだしね。いろいろ、人間関係はそうでもないらしいんだけど語学堪能な人でないとね、……まあ」

言葉を濁し苦笑され、そうなんだろうなと思う。

世界中の空港と関わるということは、英語以外の語学力も必要とされるのだろう。

しかもそれらを自由自在に使いこなし、通訳なしで交渉するようなエリートばかりと来たら、最初は意気揚々でも己の実力を知って萎縮してしまうかもしれない。

それを心配されているのだろうが、電話番号程度の語学力でいいのであれば機内誌編集部とそう変わらない。

現地のツーリストや記事ライターからの電話はしょっちゅうだし、上がってきた原語の記事をネットの翻訳サイトとにらめっこで機内誌に載せられるレベルにブラッシュアップする仕事も当たり前にある。

だから目をつけられたのだろう。

それなら他の社員でも思ったが、機内誌編集部は出世コースからやや外れており、どちらかというとのんびりとした人や、定年間のベテランさんが多い。

若手は理沙と瀬川ぐらいたが、勤務態度を考えればとても瀬川を推薦できない。また、産休の代打ということは女性のほうが都合がいいなどもあるのかもしれない。

どちらにしても理沙に断る道はない。というか断るなら退職を覚悟するような話だ。

「それで、いつからですか？ 五月……ですかね」

カレンダーを見つつ考える。今が三月第三週だから、四月の繁忙期を避けて——と考えていたところに、上司のとてもない発言が耳に入る。

「いや、来月から」

「あと十日しかないじゃないですかー！」

「幸い、機内誌の入稿は終わってるし、抱えている案件だけ引き継ぎしてもらえば大丈夫だから」

こんなに突然、しかも嬉しげに送り出されては、実は自分はこの部署に必要なかったのでは、と少ししよげてしまう。

「俺もみんなも水谷さんには感謝してるよ。誰かさんの尻拭いとかもしてくれてたしね。だから困るっちゃ困るんだけど」

そこで言葉を句切り、課長は苦笑してヒソヒソ声で伝えてくる。

「でも、あつちは常に人手が足りない状況らしくて、明日にでもつていうのを、ちよつと引き延ばしたんだ」

「そうなんですか？」

聞き返し、それもそうかと納得する。

人手は足りていないが、誰でもいいわけではなくなると、慢性的に人材が不足するのも当然だ。しかも、所属社員のほとんどが、日本には半月いるかどうかというレベルで海外を飛び回っているらしいから、教育も進まないのだろう。

「それにさ、水谷さんにも、いろいろ片付けたいものとか、伝えたいライターさんもいるでしょ？」  
そんなに表情が読まれやすいのかと思いつつうなずけば、「よし、決まり」と編集長は笑って立ち上がる。

「それじゃ、あと十日、よろしく頼むからね。水谷さん」

「はい」

不安はあるけど、とにかくがんばってみよう。

（これが、新しいチャンスになるかもしれないし）

立ち上がり、伸びをしながら理沙は気合いを入れ直し、とにかく引き継ぎはきちんとしないと自分のデスクへと戻っていった。

航路開発部のドアを肩で開け、中に入った瞬間、理沙は手に持っていた私物を入れた箱を落としそうになった。

壁一面のディスプレイには世界各国の地図と運航状況が表示されており、脇にはSGJの飛行機の離着陸予定がリストとなつて、刻一刻と移り変わりながら映し出されている。

机はどれも真新しいが、そのほとんどに人がいない。

おまけに塵<sup>ちり</sup>一つないほど片付いているのだから、まるで近未来に迷い混んだかのようだ。

いつも書類がそこらに積み上げられていて、雑然としている機内誌編集部とは完全に別世界だ。

——本当に、こんなところでやっていけるのだろうか。

あまりにも今までと違う景色に呆然としてみると、部屋の奥から「こっちだよ」と声をかけられた。御門守部長だ。

仕事中だからかシャープなフレームの眼鏡をかけている。蛍光灯の光が青く反射しているのを見ると、ブルーライトカットレンズのようだ。

それにしてもと思う。

結構な距離があるのに、すぐ理沙を見つけるあたりかなり目がいい。

少し前までパイロットをしていたのだから、当然といえば当然かと考えつつ、おっかなびつくりで荷物を抱えて呼ばれる方へ行けば、彼は満面の笑みで迎えてくれた。

「ようこそ、航路開発部へ」

少年のように純粋な笑顔にドキリとする。

心から喜んでいるとわかる笑みを大人がすると、こんなに魅力的なものなのだと理沙は初めて思ひ知った。

ずっと手が差し出され、理沙は一瞬戸惑う。海外との交渉がメインなだけあって挨拶も外国人同士のようだなと思いつつ手を差し出すと互いの指先が触れる前に、御門守の手が空を流れ、理沙が抱えていた段ボール箱を奪う。

「えっ」

「重かっただろう。呼べば迎えに行ったのに」

まさか部長に荷物運びなど頼めるわけもない。

なのに、ごく自然かつ当たり前に紳士な態度を見せつけられて、驚くよりも恐縮してしまう。

「いえっ、これぐらい大丈夫です。私が持ちますので」

「これぐらい、なら」

ぴたりと御門守が足を止めて振り返り、意味ありげに口の端を持ち上げ笑う。

「私が運んでも問題ないね？」

からかっているのか、猫のように細めた目が実に楽しげだ。

そんな様子もいちいち魅力的な上に、持ちます、持ちませんのやりとりを実にスマートに封じられて反論も出ない。

やっぱり元機長として国際線を飛ばしまくっていた人は違う。やることなすことが日本人男性の標準から上を行っている。

それとも創業者一族という生まれから、マナーやらなにやらを幼い頃から叩き込まれているのだろうか。

(そりゃ、食堂に來ただけで黄色い悲鳴が上がるわ……)

なんというかも、そこいらの男性と圧倒的にランクが違う。

生まれた時代が違えば、貴族の家の当主でもやっていたのではないかと思える落ち着きと、品のある佇まい。

しかも他人に対する気遣いも上手で、人としての魅力がこれでもかと加算されている。

そんな人の前で、ぽけっと空を見ながら独り言を呟いていたなんて、本当に黒歴史だ。忘れたい。マナー通りに三歩先をこちらに合わせた歩調で進む御門守に、生まれたてのヒヨコみたいな動きでついていく。

どんとフロアの奥に入っていく、事務室が別にあるのかな、とのんびり考えていた時。

「君の席だよ」

そう示された場所を見て、理沙は今度こそ声どころか呼吸を忘れてしまう。

(なんだって、御門守部長の席の真横……!)

卒倒しそうになるのを踏みとどまり口を開く。

「あつ、あの。そこは普通、課長とか、部長の秘書がお座りになる位置では……!」

編集部という少し特殊な業務に関わっていたが、それでも、他部署にお使いに行ったりインタビューで訪れたりするので、一般的なデスクの配置ぐらいはわかる。

絶対、間違いに違いない。否、間違いであってほしいと願わずにいられない。

あわてて疑問を呈すると、御門守はなにが困るんだろうと言いたげな仕草で首を傾げ、理沙と視線を合わす。

「航路開発部はプロジェクトごとに個々が動くから、課のくくりはない。だから課長はいない」  
荷物を下ろし、横にある自分のデスクに腰を預けて腕を組むと、指先で自分の肘をトントンと打ちながら、目線を上にやり思案顔となる。

「あと秘書はグループセクレタリーがやってくれているが、私は身軽なのがいいから基本は自分で管理している。……まあ、少しは水谷君に手伝ってもらうこともあるが……」

「秘書業務をですか!」

「そんなに難しいことは頼まない。他部署や取引先から入った急な予定をグループSNSに流して、私のスケジュールを見て予約してもらうのと、車の手配ぐらいか」

秘書を置かず、身軽に動きたいというのは本当なのだろう。いわゆる雑用的なものかと安堵する。「前任の安藤さんに頼んでたことをそのままお願いする感じた。そこまで業務はきつくないと思う。安藤さんは新卒から四年目までずっとここだし。……語学に多様性があるってこと以外はね」

ふ、と口元を緩め、安心させるように微笑まれ、理沙は内心で胸を撫で下ろす。

「相手がヨーロッパやアメリカの国々ということもあり、月に三、四回、夜勤の電話当番が回ってくるが、送り迎えはタクシーだし、翌日は休み」

理沙が安心したと見た途端、業務のポイントを説明され、あわててポケットから手帳を取り出しメモを取る。

「聞いているだろうが、語学に対する抵抗があるときつい。いろんな国の言語で電話がかかってくるからね。まあ、会話自体は電話の取り次ぎだからすぐ慣れるが、頭の切り替えか……」

「頭の切り替え？」

「この部署にいる人間全体に言えることだが、時々、自分が何語で会話しているのかわからなくなってくる時がある。企画社員はほとんど海外出張に出ていてここにはあまりいないから、日本語で話す相手もないし」

言いつつ、少しだけ照れたように頬を指で掻いて御門守が続ける。

「海外からの電話を受けてすぐ出張して、機内で客室乗務員に日本語で話しかけたつもりが英語だった。英語で話しかけたのか、中国語で話しかけたのかわからなくなったり」

それはなんとも羨ましいというか、エリートならではの悩みだなと理沙も苦笑してしまう。

「で、ごまかすために両替しそねたドルで、照れ隠しにチョコレートを買うハメになる」

理沙の気が和らいだのを感じたのか、御門守もちよとした冗談を言いつつ、デスクの上にあっ

た綺麗な箱からチョコレートのスティックを取り出し、理沙へ差し出してきた。

「はい。今は電話の少ない時間だから、それでも食べてゆっくり片付けなさい。……環境が違すぎて想像がつかなくて、緊張もしただろう？」

微笑まれ、この人はなんだかすぐ相手への気遣いが上手いのに加えて、知らず自分のペースに巻き込む技に長けているなあとと思う。

きつと仕事もできるだろう。そして要求される仕事も大変だろう。

(でも、この部長がいるなら大丈夫)

そんな自分の気持ちの変化に驚き、尊敬を抱くと同時に、少しずるいなとも思う。

(なんとというか、人遣いがすごく上手い。機長としてチームを束ねて空を飛んできたからかな。こんな風に扱われたら、もう、ついていきますとしか言えない)

あまりにも厳しそうだったら、早めに断らないといけないと考えて胃を痛くしていたのが嘘のようだ。

今度はこっち、と、どこか楽しみに手を振りつつ課内を案内する御門守を目で追いながら、理沙はもらったばかりのチョコレートをそっとスーツのポケットに忍ばせた――。

(部長が、課内を案内してくれたから、思っていたより暇な部署なのかな、と思っていたわけですよ。初日は)

「好、再見（ハオ、ツアイゼン）——はい、また今度」と中国の航路企画部からの電話に返し、受話器を置いた理沙はつい溜息を落とす。

時計を見ればもう十七時を過ぎており、退勤まであと少しというところだった。やっと波が去った。

航路企画部での業務は難しいものではなかったが、ともかく波がすごい。

世界各国とやりとりするということは時差があるということだ。

そのため、相手のビジネスピークもこちらとズレており、休む間もなく電話対応している間に、もう昼休みを過ぎているなんてこともしばしば。

かと思えば、電話がウンともスンとも言わない時間もあり、ひよつとして壊れているのではと疑いたくなることもある。

ノルウェー、フランス、ドイツ、イタリアとヨーロッパ圏から電話があり、一拍置いて、中国、台湾、韓国とアジア圏からの電話が続く。

初日に御門守が言ったように、気を付けていなければ、自分が何語を話しているのかわからなくなる——どころか、日本人だったことすら忘れそうになる。

基本的には英語で対応可能だが、挨拶や急いでいるとあちらの言葉になったり、こちらを氣遣って片言の日本語でかけてくれたりする人もいるから、毎日頭の中は万国旗がぐるぐる回っているような感じだ。

そんな調子でもう二十日。気が付けば四月は下旬になっていた。

初月はなんとか乗り切れそうだと安堵している理沙をからかうように、電話が高らかに鳴り響く。受話器を取れば、「チャオ」と陽気なイタリア語が耳に届く。

ルア——マルタ島にある国際空港に拠点を置く格安航空会社からの電話だ。

確か、グループ子会社である格安航空会社とコードシェア便を出す企画を持ちかけられているはずだったなとメモを手にし、相手のイタリア語を注意深く聞く。

（一日も終わりに近づき、疲れが溜まっているのでミスしやすいから気を付けないと）

こちらからも「チャオ」と挨拶の言葉を返せば、明るい笑い声の後に流暢な英語に切り替えられ、御門守部長とあちらのCEOとのビデオ会議の予定を変更してほしいとの要望が伝えられる。

時間を聞けば、十四時だということで御門守のスケジュールをパソコンでチェックすれば、幸いにも二時間ほど空いていた。

相手が、一時間もかからないというので、その時間に予約を入れて受話器を置く。

あとは日報を記入して、今夜の電話当番である企画社員の高中に引き継げば今日は終わりだ。

長かったのか短かったのかはわからないが、充実はしていたなあ。などと呑気に考えつつ、日報の報告欄を埋めていていた時だ。

隣の席で黙々と仕事をしていた御門守が眼鏡を外し、「水谷君」と呼びかけてきた。

「はい、なんでしょう」

明日の予定のことかな、と秘書業務も兼任していることを思い出しつつ席を立つと、彼は少し苦笑いながら自分のパソコンを理沙のほうへ向ける。

「このイタリアのマルタからの会議予約だけど」

「はい」

「日本時間……じゃないよね？」

言われ、はつとする。

英語で話していたので意識せず予約を入れてしまったが、日本時間の十四時は向こうでは午前七時。つまり、朝食の時間だ。

「エスプレッソかレモンのグラニテをすすりながらつてのは洒落ているけど、向こうのCEOは確か、お寝坊さんだったはずだ」

にやりと口端を上げ言われ、理沙は真っ青になってしまう。

つまり、相手は現地の十四時に会議を入れたつもりで——イタリア、西ヨーロッパとの時差はどのくらいだっただろう。夜中だったらどうしようと思筋に悪寒が走り抜ける。

「現地の十四時ならこちらでは二十一時だ」

基本、仕事は定時までには終わらせることを部の方針にしている御門守に、残業をさせてしまうとは目の前が暗くなる。

「そんな、死にそうな顔をしなくても大丈夫だよ。……ちょうど仕事が残っているから、残業して

もいい」

どうせ承認するのは自分だしね、などと冗談を交えつつ言われるも、これで終わるとは理沙は思っていない。

「だがミスはミスだ。ちゃんと自分でフォローしてもらわないと」

「はい……」

「今日の電話当番は高中君だったね？ 彼の分を君が残って担当するように」

夜の電話は北アメリカ——主にカナダだけで、たまに気が早いニューヨークから電話があるくらいだ。対応は英語でできるので難しくもなければ頻度も低い。

とはいえ電話番だけで終わると思えず——。

「会議の書記も、水谷君が対応するように」

難易度の高い聞き取りとなる会議書記を命じられ、ずんと肩が重くなる。

けれど、それ以上に自分のミスが痛かった。気を付けないと、ちゃんと聞き取らないと、と気が逸るあまり、時差にまるで考えが及んでいなかった。

完全に気が緩んでいた自分のミスだ。

なんとか食らいについて、迷惑にならないようがんばっていたのに、よりによって最終週でこんな単純ミスをしてしまうとは。

(しかも、御門守部長を残業させてしまうなんて)



基本的に怒ることはなく、諭すように指導する御門守だから、この程度の叱責で済んでいるが、違う部長だったら大激怒で、電話して再調整しなおせと言われてもおかしくない。

ミスもさることながら、理沙にはまだ会議調整するのは無理と思われ、失望させてしまったのではと情けなくなってしまう、それが余計に気を重くする。

「ほら、落ち込んでばかりいない」

知らず俯きがちになっていた額をつんとつつかれ、びっくりして顔を上げれば、御門守は眼鏡のつるを摘まんでもてあそびながら、面白そうに目を細めていた。

「電話番号といっても、今日はそうそう電話はかからないだろう。だから宿題を出そう」

そう言いつつ、御門守はデスクの引き出しからテキストの束と小さな辞書を取り差し出してくる。

「イタリア語のメール翻訳だ。……九十点いかなければ罰ゲームだから」

くくつと男らしい喉仏を揺らし笑うのが、なんだか薄ら寒い。

しかも。

「きゅっ……」

「九十点は無理とか言わない」

思わず声に出そうだったことを先に釘を刺され、理沙はぐつと言葉を呑み込む。

いや、音を上げている場合じゃない。

課題を出されたということは、期待されているということだ。

気持ちを前向きに切り替え、はい、と返事をして席に戻り、深呼吸した後テキストをめくる。

(それにしても)

辞書を開き、筆記具を用意しつつ理沙は思う。

できた部長だ。

部下の失敗に対し、厳しく叱責するのではなく、すぐに対応策を出し、挽回するチャンスを与え、さらに成長させるように促すとは。

仕事ができるだけではなく、人として成熟してないところはいかない。

しかも理沙だけではなく、部の全員に対し同じフラットな対応なのだからすごい。

一度、損失を出しかねないミスをした社員を見たことがあるが、今と同じ穏やかな調子で、起きたトラブルを楽しむようなそぶりさえ見せながら、あつという間に元の路線に戻してしまう。

その時、横で見えていた理沙がよほど驚いている顔をしていたからか、あるいは、もの言いたげに見えたからか、御門守は理沙をちらつと見た後で内緒話をするような小声で言った。

——空でのトラブルだと、犯人捜しをしている暇なんてないからね。

そう言われ、この人は機長で、空の上では社長よりはるかに重い責任を持って、乗客とスタッフの命を預かっていたのだとしみじみ感じた。

さすがというしかない。

と同時に、尊敬の気持ちも日々募る。

（こんな上司だから、部の人たちも力になりたい、認められたいってがんばれるんだわ）  
すぐわかる。

理沙自身、この航路企画部に来て日が浅いのに、すっかり御門守の信望者だ。  
この人のためになにかしたいし、この人によくやったと褒められたいと思う。

だからこそだろう。理沙が選ばれるまで、なかなか次の担当者が決まらなかったという理由は。  
この二十日、時間にすればたった三週間ほどの間に耳にした噂が頭をよぎる。

——秘書をつけず、電話担当も決まらなかった理由は、御門守部長がモテすぎるから。

秘書室の女性の誰もが御門守の担当を狙っているのはもちろん、最初は仕事に意欲を持っていた女性でも、近くで働くうちに彼に惹かれて仕事にならなくなってしまふ。

だから次の担当者も見つけにくかったのだと。  
前の電話担当が長く続いた理由はただ一つ。幼なじみと学生結婚して、すでに既婚者かつ子どもがいたからだろう。

食堂や更衣室で耳を澄ませば、〃彼氏がいても御門守部長なら狙いたい〃だとか〃夜闇に乗じて押し倒してみたい〃などの囁きが聞こえてくることがあるほどだ。

電話番秘書もどきに選ばれた理沙への好奇心や嫉妬めいた視線がきついのもあって、できるだけ食堂や更衣室では気配を隠すようにしているが、それでも耳に入る。

——あるいは、牽制として耳に入るように噂しているのかもしれないが。

ともかく、そんな調子で女子人気は高い。

実際、理沙だって、ドキッとすることが多々ある。

（仕草のいちいちが上品でセクシーっていうのは、ずるいと思う）

生まれ育ちのよさからくるきちんとした動作、ストイックなスーツ姿はもちろん、眼鏡をかけた理知的な横顔もぐつとくる。

なにより、時々見せる少年のような悪戯いたずらっぽい笑みは、反則級の破壊力だ。

気持ちぐらつきそうになるたびに、彼は上司と念仏のように唱えているものの、普通ならとくに恋していておかしくない。

とはいえ理沙は代役の一、二年しかこの部署にいないし、御門守に気がない、あるいは気を持たないだろうという点でも選ばれたに違いない。

仮に気を持ったとしても、元機長のエリート上司。しかも創業者一族という華々しい彼とはまるで釣り合わない。

たとえるなら大輪の薔薇とペンペン草ぐらい不釣り合いだ。

（上司として尊敬しているのが一番）

そう。勘違いしちゃいけない。

これは彼に認められたいという部下としての思慕であって、異性へものではない。

恋愛経験が皆無だから意識しそうになるだけで、相手はこちらにまったく気がないだろうし、自